

天帝の峰、クーラカンリで 痛恨の事故発生 雪崩に逝った3人の仲間

高橋和弘

10月1日、チベットの高峰クーラカンリで雪崩が起き、会員を含む隊員3名が亡くなった。出身大学や派遣母体を超えて、個人的なチームとして組織された登山隊だった。事故の経緯を高橋隊長に報告してもらう。

1999年5月9日、私と加藤慶信はロープをつなぎ合い、ヒドンクレバスの潜む雪稜をその収束点に向けて歩を進めていた。最後の雪壁を上がり十数メートル。眼前に未踏の最高峰ガンケルプンズムが飛び込んできた。周囲を見回す。広大な台地のテーブルマウンテン、おそらく名前もないであろう無数の山々、荒涼としたチベッ

トの大地に宇宙から飛んできた寶石を思わせるプマヨンツォ。息をのむ光景であった。自然の偉大な造形から発せられる気に満ちたその頂は、神の存在を感じさせるほどであった。このリヤンカンカンリ頂上での至福の時を、かけがえのない素晴らしい仲間と共有できたことは、私のなかで特に大きな財産となっている。

そしてわれわれの登山活動を威風堂々とした姿で常に見つめ、私の心に残る存在であったのが、天帝の峰、クーラカンリであった。

このリヤンカンカンリ登山は、大学や大きな派遣母体による登山隊ではなく、まったく個人的なチームとして行なわれた。育ったバックボーンの異なる者同士が、ひとつのチームを作り、未踏峰に挑む。出身母体が異なるがゆえに生じる意見の対立を、過去の登山隊で経験していたが、この登山隊はお互いの長所を相乗させ、あたかも何年もかけて組織されたかのよるような素晴らしいチームであった。

登山隊の組織化とその精神

あれから9年、私と加藤は明治大学の登山隊でいくつもの高峰に

登頂する機会に恵まれ、また各自の目標に向け、登山活動を続けてきた。そうしたなか、リヤンカンカンリのように各大学山岳部OBが集まって、ひとつの大きな登山をやるう、という気運が芽生えてきた。9年前、若手隊員として参加し学んだ多くのことを、今度は隊を率いるかたちで継承していければ、と考えた。いくつもの候補のなかで、経験の浅い隊員にも頂上に立つことで得られるものを感じてほしいという思いと、9年前に見たあの山が、ずっと心の中にあつたこと、そしてその主稜縦走は未踏であることなどから、クーラカンリの縦走および主峰の全員登頂が、目標として申し分のないものであると考え、この登山隊がスタートした。

近年、最も高所登山の経験が豊富な加藤(32)を登攀隊長として、愛知学院の桜井孝憲(34)、早稲田の有村哲史(27)という両大学のなかでも特に意欲的に取り組んでいるOBが隊に加わり、最年少の明治の三戸呂拓也(33)を加え、登攀の中心メンバーが決まった。その後、リヤンカンカンリ登山隊では副隊長を務めた中村進さん(62)もこの計画に加わり、2004年にかなわなかった主峰登頂を、今回は撮影担当として目指すことが決まった。また、1991年、92年、日中合同ナムチャバルワ登山隊でマネジャーを担当した梶田正人氏(47)、第48次南極観測隊員の志賀尚子先生(44)も加わり、総勢8名からなる登山隊が結成された。

異なる大学山岳部の出身者同士がひとつのプロジェクトを独自に作りあげていく、というリヤンカンカンリの登山で培われた精神をこの登山でも継承し、各隊員がそれぞれ専門分野で力を発揮して準備が進められたが、出発までには幾多の障害があった。3月14日に始まるチベットでの暴動、それに伴う入域規制、北京五輪のための警備強化などにより、外国人のチベット入域が困難な状況下にあった。そうしたなか、中国チベット登山協会との連絡窓口として許可取得作業を担当していた梶田隊員が、7月20日に埼玉県で沢登り中に亡くなるという事故が発生した。残された隊員は、悲しみを胸に9月の出発に向け、登山許可取得をはじめとする一切の準備を立て直し、そして多くの方から多大な協力を得ながら、9月14日、7名が梶田隊員の魂を胸に日本を出発した。

突然の事故

登山隊は9月20日に麓のザリ村に移動、数日間の滞在の後に標高5350mのABCに入った。今回、われわれが立てた計画は、クラーカンリ北壁から下る氷河をつめ、5900mのC1から6675mピーク(前衛峰)に突き上げ、支尾根をたどって未踏の北稜に上がり、北稜上に2つの前進キャンプを設けて、まず縦走隊の下降路を全員で作る、というものであった。その後、縦走隊と北稜隊に分かれ、縦走隊はC1から北壁側稜(東海大が登ったルート、または東端の急峻なりッジ)を東峰へ上がり、主稜線を主峰へ縦走、北



ABC上部から望むクラーカンリ北面。右から主峰、中央峰、東峰

稜隊と合流して下降する予定であった。

ABC入りまではまだモンスーンの雲に覆われる日が多かったが、雲は6500m付近近にかかることが多く、それより下部では、降雪はあってもちらつく程度で、まったく積雪はなかった。この雲も登山を開始するところから取れはじめ、気圧の谷の通過時も、せいぜい1〜2cmの積雪で、すぐに解けてしまう程度であった。

こうした天気にも恵まれ、C1の設営は予定通り進み、モンスーン明けとなった9月30日、C2へのルート工作に向けたステージが始

まった。この日、ルート工作隊の加藤・有村、撮影のため2名に同行した中村がC1入り、翌10月1日、前衛峰へ突き上げる尾根ヘルート工作を開始した。尾根末端はもろい岩のため、尾根北側の雪の斜面へフィクス工作を開始した。一方、私は桜井、三戸呂とC1入りのため、午前8時にABCを出発した。

この日、午前11時に両チームとも順調に行動しているという無線通信を最後に、加藤チーム3名と連絡が取れなくなってしまう。午後5時を過ぎてもルート上に姿を確認できないことから遭難を認識し、私と桜井が捜索に向かい、午後6時50分、6000m付近で3名の遺体を発見した。上部斜面には雪面が割れた跡があり、3名は雪崩に見舞われ、下部斜面まで流されたものと判断できた。

即時登山は中止、遺体搬送および撤退作業に全力を注ぎ、ザリ村住民の多大な協力を得て、5日間かけてザリ村へ搬送し、6日早朝にラサにてご家族と対面、9日にご家族に抱えられ帰国した。

日中登山交流史そのものとも言える中村さん、高所登山界を牽引

すべき存在であった加藤、これからの日本登山界を担うホープとして囑望されていた有村、さらに日中登山の架け橋として大きな役割を果たしてこられた梶田さん。彼ら4人とともにひとつの目標に向かったこの1年間は、残された4人の心に、一生の宝として強く刻まれていくことになる。同じ意志を持った者同士が、出身母体の棒を取り払って作った小さなチームであるが、同じ意志を持って支えてくれた多くの協力者、関係した人すべてがこの登山隊の一員であると思っている。

かけがえない仲間を失った痛みは一生消えないし、消さずにいるように思う。そしてそれ以上に、彼らの登山に対する姿勢をわれわれが受け継いでいくことで、この登山隊が一層意味あるものになると考えている。

最後に、われわれクーラカンリ登山隊員全員の意志を代弁する文章として、ABCで加藤が残した文章をここに掲載する。

加藤慶喜が残した手記

「私たちは本日無事、ABC(アドバンスド・ベースキャンプ)を



ABCに手記を残して逝った加藤隊員

約5300^{メートル}地点に建設しました。ここを拠点にして、これから本格的な登山活動が始まります。ついに目指すクーラカンリの麓に辿り着きました。ここに来るまでにすでに多くの困難がありました。が、数え切れない程の多くの方々のご協力、ご支援があつてこそこの今日のABC建設だと思つています。自分の恵まれた境遇を思う時、これから山の中で過ごす数十日を日々懸命に重ねていかなければならないと強く感じています。

僕は昨日、有村隊員と先行してABCに入りましたが、今朝、目覚めると眼前にクーラカンリがこの高燥のチベットに屹然とした姿

で立ちただかっています。1年前、クーラカンリを目標に決めて以来、寝ても覚めてもこの山の事が自分の心を占拠し、想い焦がれてきただけに、恋する人にやっと出会えた感じがします。この山を登るために、縦走するために、生きて還るために何度も何度も頭の中で想像して、シミュレーションを繰り返してきました。

山はその荘厳さゆえに、美しさゆえに厳しい残酷な側面を併せ持っている。いまこの夜空を彩る無数の星々と同じ程の危険をはらんでいる。これをどう回避してその山に登るのか。雪崩を、クレバスを、落石をどう避けるのか。高山病で動けなくなったらどうするのか。7000^{メートル}を超える壮大な頂上稜線で悪天にかまったらどうするのか。いくら考えても答えの出るものではないが、それでもひたすら考え抜く事が山に向かうための準備の精髓と言つてもいい。「絶対に事故を起こしてはならない」。これが大前提としての出発点でなければ、山に登るべきではないだろう。物事に、この世の中に「絶対」というものはあり得ない。それでも僕たちは「絶対」を心に

誓い、「覚悟」をしなければならぬ。「死んでもいい覚悟」ではなく「何があつても生き抜く覚悟」を。

リスクについて考えるのと同じように無事登頂に成功し、下山した時の喜びがもたらす幸福感、充足感についても、何度、夢想してきたことだろう。日々の時間を埋め尽くすほどの想像が、この1年の生活を支えてきた。そして僕たちは現実はその山の前に立っている。想像、空想、夢想ではやはりそれなりの喜びしか得られない。生きていく僕たちは、この厳しい現実世界のなかで膨らませてきたその夢を具現化することで、初めて本当の幸福感が得られるはずだ。そのために自分のすべてを出し切り、新しい世界を切り拓きたい。この素晴らしい仲間達と共に」

*

11月8日、東京・目白の学習院大学で、日本クーラカンリ登山隊の報告会が開かれ、高橋隊長から事故の報告があつた。1日11時すぎ、前衛峰から派生する支尾根の下部6000^{メートル}付近で、30度から40度の斜面をルート工作中、足下、もしくはやや上方から雪崩が起きたと思われる。(編集部)